

日本無政府共產黨

I

櫻川 清夫

（以下為模糊不清之文字，內容難以辨識）

日本無政府共産党

相 沢 尚 夫

一 「事件」の発端

一九三五年十一月のはじめに、日本無政府共産党事件と呼ばれたアナキストに対する全国的な一斉検挙が行なわれたことは、既に多くの人々からは忘れられているに違いない。この事件を最後として、日本のアナキズム運動は第二次大戦が終るまで実質的に中断したのである。ファシズム的弾圧がアナキズム運動の存在を許さなかったからである。そして日本の敗戦後に、アナキズム運動は、日本アナキスト連盟の結成によって復活した。

この党の活動が、いわゆる「事件」となったのは、私が検挙されたのにはじまったのであるが、最後に捕えられたのは二見敏雄であった。彼はその年の十二月二十四日の夜、クリスマス・イブの雑踏の銀座で警視庁特高に逮捕された。その時、私は築地の水上警察の留置場にいたのであるが、その日の夜中に看守から彼が捕えられたことを耳打ちされたことをおぼえている。彼は私が購入して渡したブローニング小型拳銃に、実包約五〇発を持っていると見られていたために、全国の警察は彼を発見するために血眼になっていた。だから彼はクリスマス・イブの夜の銀座の街頭で捕えられなくても、いずれは捕えられたかもしれない。そうであるとしても、この夜の逮捕については、私は疑惑の念を打ち消すことができないのである。

その日、彼は最も信頼していた同志Xに会うために銀座の三共喫茶室へ出かけて行った。オーバーのポケットに忍ばせたピストルを握りしめて、入口で用心深く立ち停まった彼は、室内を見廻して疑わしい人物がいらないらしいと思うと、室内へはいって行った。Xは先に来て彼を待っていた。彼はXに金策を依頼していたので、Xから金を受け取る心算だった。Xは彼がテーブルにつくと今日は金が出来なかったが、もう四、五日待ってくれば必ず融通するということを、くどくどと言いつつ訳した。彼はXが約束を守らなかったことに怒りを感じたが、怒ってみたところで仕方がないと思い返して、コーヒーを飲み終えると直ぐ席を立った。彼はXが何故かそわそわして落付かない様子だと思ったが、気にはしなかった。約束を守れなかったからだろうと思ったの

である。二人は一緒にこの店を出た。そして人通りの激しくなってきた街角で、次に会う日の場所と時間を約束して別れた。Xは高く手を振って別れの挨拶をした。金は出来ないな、もう会う必要はないと彼は思った。後になって、Xが大きく手を振ったのが、何かの合図だったのではなからうかという疑惑が生れた。Xは別れの挨拶に大きく手を振ることがなかったからであった。しかしその時には、気にもとめなかったのである。

彼は向い側の大倉組の赤煉瓦の建物の横に出た。靴磨きがいるのを見ると、彼はいつもの通り靴を磨こうと思った。靴磨きの台に片足を乗せた時であった。突然、男に飛びかかられた。突嗟に彼はしまったと思ったが、羽交メめされているので身動きできなかった。「二見君だね」ということと「ピストル、ピストル」と怒鳴る声だけが聞えた。

後になって彼はその時のことを思い返してみると、疑惑の影が次第に濃くなるのを、打ち消すことができなくなった。

特高は彼が三共喫茶室へその時間に来ることを知っていたように思えてならないのである。だが其処でXと会うことは、彼とXだけしか知らなかった筈である。Xはいつになくそわそわしていたことも疑えば疑わしいし、別れ際にあんなに高く腕をあげて合図のようなことをしたのもおかしいことだ。けれどもそれはみんな推測に過ぎないとも言える。特高は常時、銀座へ張り込んでいたのかもわからないし、偶然、彼を発見したのかもしれない。だが彼を捕えた特高は、一人

も彼と顔見知りの者はいなかったことも事実である。しかも彼はその時、ドーランで化粧して人相を変えていたのだから、写真だけでは、わからなかったに違いない。しかし今となっては、真実を聞き出すことはできないだろう。

今では、二見は既に死んでしまった。当時一緒に党を組織した同志は殆んどみんな死んでしまった。植村諦聞も寺尾実も梅本英三も病のために亡くなった。伊藤悦太郎は出征してフィリピンで戦死したというのであるし、田所茂雄は徴用されてスマトラへ向かう途中東支那海で乗船が撃沈されたので、海底に沈んだ。入江汎も病で亡くなったと聞いている。われわれが共に意図した運動は、一九三〇年代の日本のアナキズム運動の総括とも言うべきものであったから、これを明らかにする必要があるが、これを書いて置く人がみんな死んでしまった今では、私がこれを書いて置くより仕方がなからうと考えるのである。僅か二カ年ほどの活動で、見るべき成果は殆んど何一つもなかった運動であるから、見戯に等しいと冷笑する人は、当時もいたし、今もいるだろうが、その批判は批判者にまかすことにしたい。ただ今後のアナキズム運動は、当時とは非常に変化した資本主義社会のなかで革命運動をとらえて行くべきではあるが、過去の異なった客観状況のなかで行なわれた運動が、時には現在まで尾を引いて、いわゆる教条主義的誤りに陥ることがあるので、過去の運動の成果や失敗や過誤や逸脱は厳しく批判される必要がある。この回想がその素材となるなら幸だと思う。^(注1)

まず事件の発端からはじめよう。

一九三五年の夏のことであった。自由連合新聞^(注2)の発行人をしていた山口安二が川崎で捕えられた。これは単純な事件だったから、間もなく元気で帰って来るだろうと思っていると、なかなか帰って来なかった。そして川崎から警視庁特高へ送られたが、出て来る様子はなかった。田所茂雄が面会に行くと、山口はどうも様子が少し変だと言う。どんな風に変なのかと聞くと、ガリ版のパンフレットを発行した者がいると見えて、そのパンフレットは見せてくれたが、自分は見たことのないものだった。それなのに知らない筈はないと、実に執拗いのだと言う。どんなパンフレットだったかと聞くと、表題がなくて、第一章は最高の理想社会としての無政府と書いてあったと思うのである。二人の特高に聞かれなないように話したのだから、詳しいことは聞けなかった、と帰って来た田所が報告した。これだけ聞けば、党中央部第一号パンフレットと呼んでいた出版物が、早くも特高の手に入ったことは確実とわかった。どんな経路で彼らが入手したのかは判らなかつたが、アナキストの間に、党が組織されたと彼らは考えている筈である。だから何かのキッカケを掴んだら、一斉に襲いかかって来るだろうと予想した。即日党書記局は全党員に警告を発して、住居を変えるか、新しい住居を用意するようにと注意したのである。

その頃私は、本郷弥生町の鈴木館に下宿していたが、党に関する総ての文書を他へ移して様子を見ることにした。間もなく、連絡場所になっていた京橋の野村孝司の兄の事務所へ行くと、黒板

にただ「鈴木館へは行くな」とだけ書いてあった。松原五千郎からの伝言だとすぐわかったし、鈴木館が襲われたのだとも気付いた。その時すぐ山口は鈴木館を知らない筈だということを思い浮べたので、どうして特高が知ったのかは判らなかつた。とにかく松原に会おうと思って農林省へ行った。彼は農林事務官であつたからである。

松原の話では、特高は私を名指して鈴木館へ来たと言う。たまたま彼を知っている本富士署の特高が一緒に来ていたので、同行を求められて、私と二見のことを訊ねられたということだつた。

「とにかく、今までのやり方と違うな。アナ系係ではなくて、ボル系の連中に違いない。彼らは君と二見の写真を持っていた。君のはそっくりだからすぐわかる。二見のは大分古い奴らしいから、一寸わかりにくいかもしれない。ところで何をしたのだ」ときいたが、私が口ごもっている、それ以上深くはきかずに、「余り物騒なことはするなよ。今、金あるのか、あるのならしばらく何処か、そうだ、温泉へでも行ってのんびりしていたらどうだ。そのうちホットボリも冷めるだろう。オレは君に会ったら直ぐ知らしてやると言っておいたから、本名を名乗ってノコノコやってくる奴があるか。鈴木館へは当分顔を出さない方がいいだろう。今、特高が二人で張っている。ご苦労な話だが、そのうち引き揚げるだろう。時々何か違う名前前で電話してくれ。様子を知らしてやるから」と言つて笑つた。

私は自宅を襲われたことを、中執と関東地方委員会に報告した。それから二見と協議して、急速にある程度の資金を手に入れて全党員の安全な住居を用意することが緊急な問題になつたと思つたので、具体的な方法を相談しようと思つた。こうしないと特高がやる気になつたら二十四時間以内に党组织は潰滅すると思つたのである。アナキストは誰も未だ地下へ潜つてはいなかつたからである。二見と私との間で非常手段による資金獲得計画の具体的協議がはじまつたのである。

十一月のはじめに二見と小林一信と私との三人による銀行襲撃が完全に失敗した後、もう一度二見と私と二人だけで決行しようと思つた。いろいろな失敗を検討した結果、二人だけで実行するには、どうしても自動車を手に入れる必要があると思われた。これまでに何度も自動車を手に入れようとしたが、みんな失敗したので、今後もし手は殆んど不可能であろうと、考えざるを得なかつた。では誰か適当な同志をこの計画に加えようと思つて物色してみたが、見当らなかつた。その結果、この計画は一応放棄しようと思つた。今のところは、特高は彼と私だけを追求しているらしいから、二人が身をかくせば、当分は何事もないだろう。それなら一先ず上海へも行つて、場合によっては当時アナキズム運動が最も強力に行なわれていたスペインへ行つて革命運動に加わろうではないか、と話し合つた。けれどもわれわれは二人とも中国語もスペイン語も喋れなかつたのだから、全く向こうみずな話だつた。

上海渡航のために何処から乗船するか、という点については、彼は神戸を主張したので私は賛成した。私は一等船客として堂々と乗り込むのが一番安全だろうと言ったが、彼は乗船の際の検問は避けたい。それには出帆間際の貨物船に乗り込むのがいいのだと主張した。彼は経験者であったから、私に反対する理由はなかった。

十日の朝、私たちは船会社へ行って乗船券を購入しようとする、その船はあと十分ほどで出帆するから、すぐハシケで船へ行ってくれ。船へ乗ってから切符を買えばいいから、と言ってハシケを用意してくれた。タラップを駆け上った。当分は日本も見納めだという感傷が頭の中を横切った。上海までの乗船料を支払うと「警察の人がまだいるから、直ぐ会ってくれ」と言う。一瞬しまったと思ったが、もうおそい。私は雑貨商になりすまして二人の特高のいる前へ行った。商況視察という私の身許調べは簡単にすんだが、二見の方は持っている名刺と洋服のネームが違うというのでひっかかった。昨夜洋服のネームを取っておくように注意したのに、彼は面倒だったのか、検問にぶつかるとは思っていなかったのか、とにかく特高に疑惑の念を起させてしまったのである。そんなことで手間取っている一方、船の方は出帆の時間が過ぎたから、早く終りにしてくれと言ってきた。特高は威猛高になって、「調べが終らないのにもうその辺でやめてくれとは何事だ」と怒鳴り出す。私はまずいことになったと思いつつながら、煙草を喫って待っていた。「とに角、もう少し聞きたいこともあるから、ご迷惑でしょうが、一先ず船を降りて下さい。こ

の船は長崎に寄ることになっていますから、今晚の急行で行けば十分間に合います。切符の方はこちらから会社の方へ言っておきますから」と特高が言った。抗っても仕方がないので、警察のランチに乗った。彼らは少し疑問はあるが、それほど大きな疑惑もないと思ったと見えて、私達と離れて乗っていた。

「どうする？ やるか」彼はピストルをポケットから出して安全装置をはずしてズボンにはさみながら言った。

「今はよせよ。やるのはそれが見付けられた時だ。とにかく隙があったら逃げることにしよう。その時はお互いにかまわずに」

私たちは顔を見合せて微笑みあった。顔がひきつっていたかもしれない。これが二見と言葉を交わした最後であった。

すぐ船は岸壁に着いた。

「この台湾航路の船を調べることになっているから、この船のなかで話そう」と言って二人の特高は先にタラップを昇って行った。

もう一度持物をみんなテーブルの上に出してくれと云うのでその通りにした。同じことだから私の方はすぐにすんだ。彼の方を見ると、私と同じように持物をテーブルの上に並べている。見ると紙に包んだ実包のはいった箱が二個出している。私はギョッとした。しかし彼は平気な顔を

してオーバーの前を払げて、両手をポケットに突込んで、そり反るようにして腰掛けていた。青白い顔に笑みを浮べて特高を見つめていた。

間もなく彼は立ち上がると、持物はそのままテーブルに置いたまま部屋を出て行ったが、彼を調べていた男は、腰掛けたまま煙草に火をつけていた。私は彼が逃げると直観したから、ぐずぐずしている時ではないと思った。

「煙草を買って来たいんだが」と言うと、

「下の売店にあるでしょう」と特高が教えてくれた。

私は部屋を出て下へ降りた。もちろん売店になど寄りはないで、タラップを駆けおりた。彼の姿は何処にも見えなかったばかりか、さっき船へ乗る時、タクシーが一台停まっているのを見ているのだが、今はタクシーも人力車もなかった。彼が乗って行ったのに違いなかった。どうしたものと途方にくれた。神戸の波止場のこの場所は、身をかくす物かげ一つない広場である。街の人混みのなかにまぎれ込むには、はるか彼方まで砂利を敷きつめた歩きにくい道を歩いて行かなくてはならないのである。とにかく私は急ぎ足で歩いた。特高が気が付くまでに此処を出たと思った。すると向こうからタクシーが走って来た。手を振ったが、見向きもせず走り去った。客が乗っていたのであろう。その時、遠くからオーイ、何処へ行くと呼ぶ声が聞えた。特高が二人共帰って来ないのに気付いたのであろう。その声を聞くと私は駆け出さずにはおられな

った。馬鹿げたことだったと思う。しかし私は走った。人通りのまばらな明るい広場を、血相を変えた男が走って行けば、見る人は異様に感ずるだろうが、そんなことを気にする余裕もなかった。特高がタクシーを停めたのをチラッと見て、なお走り続けた。車で追って来た彼らは、車から飛び出ると猛烈な勢いで体当たりして来た。まるでラグビーのタックルのように。私は砂利の上には倒されたのである。私は撲られたり蹴られたりしたらしいが、おぼえていない。ただ血相を変えた二人の男の憎悪に満ちた目だけが忘れられないのである。もっとも、私もそんな目付をして彼らを睨んでいたであらう。

神戸水上署の留置場に放り込まれた私は、どういう風にこの事態を切り抜けたらいいのかと考え続けたが、答えはなかなか出なかった。私が逃げ出さなくても、二見が戻って来るはずはないから、船から警察へ連行されたらどう。その上彼は実包を五〇発も置いて行ったのだから、どっちみち事はめんどろになることは明らかであった。それならば、私が捕えられたことを一刻も早く同志に伝える方法を考えなくてはならない。二日間連絡場所に現われなければ、何かあったと思うだろうが、二日の間に何が起るかかわからない。いろいろと思索していると不意に監房の鉄の扉が開いた。さっきの二人の男が立っていて、出ろと言う。いよいよ取調べだと思って、出るといきなり手錠をかけられた。そして、身体中を手でさわって何か探した。相手の男が武器を持っているかどうかを探す時の、叩くようにしてさわってみる映画でよく見るあれである。

監房のなかも念入りに探した。何もないとわかると、また私を放り込んで行ってしまった。実包が出て来たので、さぞびっくり仰天して、あわててやって来たに違いないと思った。いよいよ大事件になったと、覚悟をきめた。

私は思案し続けた。いい考えは浮ばない。朝の波止場での騒ぎを新聞記者が知ったなら、大勢押しかけているはずである。アナキストだと名乗ったら、記事になるのではないだろうか。雑貨商では記事になっても同志にはわからない。記事になるとしても、直ぐ出るかどうかが問題だ。それともしばらくは変名のまま押し通そうか。ピストルを持っている雑貨商では通るまい。私は決断がつかなかった。つかないまま寝ころんでいると、また扉が開いた。今度は取調べであった。手錠をはめられて留置場を出ると、新聞記者だろう、人が大勢いて、ガヤガヤ喋っていた。ふと見るとそのなかに顔見知りの男がいたのでびっくりした。彼の方も気付いたと見えて、驚いて話しかけてきたが、特高がさえぎって、私をエレベーターに押し込んだ。そして四階か五階のガラシとした部屋へ連れて行った。私は彼の名を思い出そうとしたが遂に思い出せなかった。けれども大学時代、五来欣造先生の政治学の教室ではいつも顔を合わせていた男である。クラスは違っていたが高等学院も同年代だったと思う。

私は賭けをするような気持で、本名を名乗った。学生時代の友人が新聞記者をしていたからだけではなかったのであるが、それも私の決断に影響したように思っている。

私は長い間、簡単に本名を名乗ったのは誤りだったのではないかと思いつけていた。秋山清が『思想の科学』誌に書いた「無政府共産党事件」によると、彼はその日の夕刊で私が神戸で逮捕されたという小さな記事を読んだと書いている。それを読んだ時、私は私の賭けは一応当たったと思った。しかしそれは大した効果はなかった。翌日の朝から、特高は全国一斉に検挙をはじめたからである。田所と伊藤とがしばらく捕えられなかったのは、不完全ながら地下に潜っていたからだった。

こうして日本無政府共産党は、その名を新聞に書きたてられて、**△無政府共産党事件▽**がはじまったのである。

二二 二見敏雄との出会い

今考えてみると、日本無政府共産党は、二見敏雄という強烈な個性が存在しなかったなら、こうした形では生れなかっただろう。しかし二見だけでは党にはならなかったかもしれない。それはテロリスト集団の秘密結社に終っただろうと思うのである。

はじめて二見に会ったのは、私がまだ早稲田の高等学院の学生だった時である。その頃東京のいろいろな大学の学生の間、アナキズムの研究会があった。それは名称はついていなかったと

思う。規約もなければ、役員は勿論のこと、世話人もいなかった。誰かが何かの問題で集まろうではないかと言い出す。二、三の者が賛成すると、場所と日時がきまる。そしてそのことを通知して歩く。決められたその日、その時間に、その場所へ行くと、何処からともなく人が集まって来る。多い時は十数名、少なければ四、五名が集まって、勝手に喋り合う。そしてこの次はこれこれの問題で話し合うときめる。それでいてみんなそのグループのメンバーだと思っているが、誰もメンバー全員が誰と誰で何人だなどということを知っている者はいなかったと思う。それでも一つのグループだが他からは呼びよしもなかった。前田淳一が学連学連というから、そんな名称なのかなと思ったが、当のメンバーはたいしては誰も自分達のことを学連とは呼ばなかった。早大の学生の杉浦万亀夫が発起人だったということを鈴木靖之から聞いたように憶えているが、私が出席するようになった一九二七年頃には、杉浦は大学を卒業して、いなかった。のちにこの研究会に出席していた人達が、黒色戦線社と社会理想研究会をつくるようになるのである。(注3) 鈴木靖之、緒方昇、鈴木柳介、榎本桃太郎、松原五千郎、谷本弘文、二見敏雄、遠藤斌、松村元、伊藤道賢、瓜生伝などが活動的なメンバーだったと記憶している。

何時の会合であったかは忘れたが、ある日の会合に行くと、黒のサージのズボンには、キチンとアイロンを当て、真白なカッターシャツに黒の細いネクタイをしめているのに、上衣は菜葉服という恰好の青年がいた。ひっきりなしにバットを喫っているので、指先は黄色く染まってい

た。煙草を喫いながら、ひっきりなしに唾か痰を吐いていた。時々、火鉢の灰のなかに吐くので、汚ないことをする奴だと思つて見ていた。二重まぶたの綺麗な目をしていて。誰かと議論しているときみえて、時々反論する時には、顔の表情が歪んで、目が鋭く光った。そしておかしなるとゲラゲラとこわれたような音を立てて笑った。その笑う時の目は、いかにも人なつこい表情に変わった。これが私の最初に見た二見敏雄であった。彼には何か人を圧倒するような妙な雰囲気があったよつていて、他人にそこはかとない殺気を感じさせる男だった。岡本潤が自伝のなかで、二見のことを考えると、すぐ頭に浮ぶのはネチャーエフのことだったというようなことを書いていたと思うが、後に彼が起した事件がネチャーエフ事件に似ていたばかりでなく、彼はネチャーエフに多少影響されていたのではないかと思えるふしがある。そして私もネチャーエフについて書いたものを読むと、彼のことを思い浮べるのである。ネチャーエフとバクニンとの合作と言われている『革命家の教義問答』を彼は読んでいた筈である。社会理想研究会が出版したバクニン全集には、この文書が加えられていたからである。彼は多分伏字なしの原稿を読んだ筈であつて、これに大きく影響されていたことは、後に党員の資質についての彼の主張のなかでうかがわれた。(注4)

私と彼とは研究会で顔を合わせただけで、議論したこともなく、一緒に仕事をすることもなかった。全然なかつたという嘘になるかもしれない。マラテスタの『農民に伍して』というパン

フレットを小作人社から出版した時は、一緒に仕事をしたからである。しかし彼がその他に何を計画し、どんなことを実行したかは人の噂話で聞くだけだったことも事実であるから、私はまるで知らなかったと言っても間違いはなかった。二見敏雄というテロリズム活動に非常に強い関心を持った男がいて、いつでも多少物騒な計画を持っている。そして彼が何を計画し、何をしようともそれは彼の自由であって、私の関知することではないという風に受けとめていた。

一九三一年の夏のことであった。農村青年社の鈴木靖之が黒連の連中に撲られたということを聞いたばかりの時だった。突然二見が湯河原から上京したと言って歌舞伎座横に下宿していた私のところへ訪ねて来たことがあった。私は「自由連合新聞」の編集を手伝ったり、農村青年社とも連絡があったりしていた時である。とりとめもない雑談をしているうちに鈴木君が撲られたという話になった。「鈴木君と君とは親しい仲じゃないか。その鈴木君が撲られたのを、君は黙っているのか。三人がかりで撲ったということじゃないか。卑怯な奴だ。あんな奴らは撲ってやなくてはいけない」とひどくいきまいたが、しばらくすると、「あんなゴミみたいな奴を撲っても仕方がないね。手が痛いだけ損だ」とゲラゲラと笑った。

それを聞くと私は彼が変わったのか、それとも私が認識不足だったのか、とにかく不思議な気がした。私は彼も「黒連」の連中の一員として、同一視していたからであった。当時の「黒連」の連中は、やることはけち臭いリヤク、口にするのは即時武装蜂起、そして意見の対立ならまだしも、

ただ気に喰わぬというだけで、二、三人になると撲るといふようなことがあったから、真面目に相手にする者はいなくなっていた。彼はこの連中とは違うのかもしれぬ、と私は改めて彼を見た。

しかし彼が父親の経営していた湯河原の新聞社の特派員になって上海へ行ったという噂を聞いた時も、そのうち上海で何かやって帰って来るだろう位にしか関心を持たなかった。とてもじっとしていられる男ではないと思っていたからである。

それが突然手紙をくれたのである。一九三一年のはじめだったと思う。簡易書簡には、長崎市浦上の番地が書いてあった。そして小さな桜の花の印が押してあった。これは刑務所の検閲印である。浦上という処を、私は天主堂がある処としか知らなかった。後に原爆を投下されて、世界的に有名な場所になったが、その頃の私はキリシタン殉難の地、浦上天主堂を知っていただけであつた。もちろん彼は天主堂にいた訳ではない。長崎刑務所浦上支所の独房にいたのである。上海へ行ったはずなのにもう長崎の刑務所にいるとは、何をしたのであるか。そのことは何も書いてなかった。後で彼から聞いた話によると、上海にいた日本の大使だか、陸軍の司令官だかに爆弾を投げようと計画して、その資金をつくるために軍の遊技場開設許可証を偽造して、公文書偽造行使詐欺で捕えられて、追放の上、長崎刑務所へ入れられたということだった。手製爆弾を造つたには造つたが、朝鮮の独立党員が天長節式典場へ爆弾を投げた事件が突発したので先手をとられたため、爆弾の始末に困つたという話も聞いた。しかし彼の手紙には事件のことは何も書いて

てなくて、ただ仕事をしている時は、君のことは思い出さないのに、独房にいるときぎりに君のことを思い出すので手紙を書いた。元気か。ということだけが書いてあったので、独房に入れられて、ひどくセンチメンタルになったものだと思えておかしかったが、直ぐ返事を出したことをおぼえている。

その頃、一九三三年であるが、前に述べたように私は自由連合新聞の編集をしていたが、その日も原稿をまとめて、山口安二に印刷屋へ渡してもらう手筈をすませて事務所を出た。自由連合新聞社がまだ全国自連の事務所のなかにあった時で、今の東銀座（当時木挽町）の大生ビルのある辺りの路地の奥に全国自連があった。松屋の横の通りが昭和通りと交差する角で、私は偶然彼に出会ったのである。彼は寺尾と一緒だった。彼が長崎刑務所を出所して間もなくの頃である。

「君に会う心算で自連へ行こうと出て来たんだが丁度よかった」と彼はにこにこして言った。

「相談があるんだ」

私たちは近くの喫茶店へはいった。客は誰もいなかった。私たちがはいつて行ったのでレコードをかけた。その頃流行していた「酒は涙か溜息か」という流行歌の曲が流れてきたのをおぼえている。

彼は次のようなことを喋った。

ファシズムの勢いがこんなにも強くなって来て戦争が起るのは目に見えている。いや、現に起

っていると聞いていいだろう。戦争は革命のチャンスではあるが、反動勢力に対して今反撃を加えておかないと、われわれは完全に押し潰されてしまう。共産党が潰されたように弾圧されることは明らかだ。ところがアナキストは何もしないで、自滅するのを待っているような有様だ。アナキズム運動はなくなってしまっている。そう思わないか。黒色戦線とか、アナキスト戦線とか言うが、何処に戦線があるのかね。雑誌の表題だけだね。戦線がないのに、運動している心算でいるだけだ。君が新聞を出しているのは、結構なことだが、それだけでは仕方がないことではないのか。運動についてどう考えているのか、それが聞きたいと思ったのだ。

ざっと、こんなことを、彼が真面目になって話す時の、沈んだ声で言った。

私は彼が何を意図しているのかわからなかった。テロリストグループをつくらうというのだろうか。単なるテロリストグループだけなら役には立たないと思っていたが、それには触れないで、戦線がないと思うのは、革命団体がないからだと思う。大衆組織の中に根を張った革命団体を組織することが必要だと思う。しかしそんなものは何もないから、新聞を通じて、そのような気運を盛り上げて行こうとしているのだが、微力で何も出来ないのが現状だ、と話した。すると彼はそれにすぐ賛成した。そして何人位同志がいたら、革命が起せると思うかとか、それにはどの位の資金が必要だと思うかとか訊ねたので、そんなことは判らないと言ったが、しきりに訊ねるので、東京に最低一、〇〇〇人位の同志がいれば、相当な運動はできるだろう。敵に一泡吹かす

位はできるだろうが、革命は情勢が変化しないと起るまいと言うと、革命的情勢を自分達がつくり出すために戦うべきだと彼は言った。資金は多ければ多いほどいいにきまっていると、資金は自分がつくってやる、それを君に渡すから、思い通りにやってくれと言った。そしていずれくわしく相談しようという約束だけして別れた。今思うと、この時が日本無政府共産党の出発点だったような気がする。私は二見のグループを、秘かに考えていた革命団体組織の計画に組み込まうと思ったのである。

しかし彼と話をする機会は、それから半年位なかった。